慎太郎

二〇〇三年一一月二日、一〇年振りにリヤドの地を踏むことになった慎太郎には、サウジが懐かしくて堪らなかった。サウジの領空に入ると、その気持ちはますます高まっていった。

池波慎太郎がこのサウジに最初に来た時は外交官だった。当時、英国で研修を終えたばかりの彼は英語のキャリア(幹部候補生)だったが、このイスラム超大国である沙漠の国サウジ、それにジオポリティクス(地政学)、特に中東に強い関心を持っていたので、在サウジアラビア日本国大使館での勤務を望んだ。

慎太郎は、学業成績、優秀で大学三年の時に外交官試験に合格すると、さっさと大学を中退し外務省に入ってしまった。そんな慎太郎に対して、どうして中東を希望するのかと不思議に思う者、サウジ赴任を思い止まるよう勧める者も多かった。しかし、お構いなしにさっさと赴任してしまった。外務

省に見切りを付け、辞める時にも、引き止める者は多かったが、さっさと現在の三友商事に就職してしまった。

彼には、そのように、思い込むと、一途なところがあった。

今回、長期滞在してみようと思ったのには、もちろん、仕事の上で石油大国サウジが重要ということもあったが、最初の赴任時の体験が強烈で忘れられなかったこともあった。

慎太郎は、父親の実家が神道の家系で子供の頃から無意識に宗教的雰囲気に馴染んでいた。ただ父親は長男ではなかったので、神主の修行はしたものの、神主になることはなかった。彼の実家は真言宗の檀家(だんか)だった。慎太郎は歴史が好きで、仏教への関心と知識は十分にあったが、特定の宗教を深く学んだわけではなかった。また、特定の宗教の信者でもなかった。普通の日本人のように、宗教とはかなりの距離があった。

そうではあったが、サウジで宗教にどっぷりと浸かって生活している人々を見ている内に、なんとなく、イスラムに対する関心が芽生えて来たのは、この家系のせいもあるのかも

しれないと慎太郎は思っていた。

バーレーンを飛び立ってから、ほんの小一時間で、リヤドはもうすぐそこに迫っていた。

「皆様、当機は着陸態勢に入りました。座席ベルトをしっかりお締め下さい。ビデオカメラ、パソコンなどの電気・電子機器類はこれからさき飛行機を降りるまでご使用をお控え下さい。座席のリクライニングとテーブル、フット・レストを元の位置にお戻し下さい。地上からの連絡によりますと、現在のリヤドの天候は晴れ、気温は一六度でございます。・・・」

スチューワーデスの心地よい機内アナウンスが流れると、リヤドでは年に数回しか雨が降らずほとんど毎日が晴れであることを知っていた慎太郎は、型どおりの気候のアナウンスに、リヤドの天候は晴れだって・・・、晴れに決まっているじゃないかと愉快に応じながら、リヤドの空を思い出して

いた。

子供の頃からずっと神童、天才などと言われ育ってきた慎太郎だったが、近寄り難い存在というところは全く無く、ちゃめっ気たっぷりでひょうきんなところがあった。ユーモアにも溢れていた。それには、慎太郎が阪急沿線の逆瀬川出身で子供の頃から松竹新喜劇、吉本興業の落語・漫才などに親しんで来たことも影響していたに違いない。そのようなこともあり、慎太郎は見ず知らずの土地でもすぐにその土地柄、人々に馴染むことが出来た。数字にも強かったし、もともと外交官よりも商社マンに向いていたのかもしれない。

身長一七八センチと日本人としては背が高く、大きな一重瞼の端正な目鼻立ちをした慎太郎は、二枚目の映画俳優のようだった。喋(しゃべ)らないでいると大層近寄り難い存在に見えた。喋ると面白く、皆、その落差に驚いた。そして、例外なく彼の人柄に惹き付けられていった。

ボーイング・トリプルセブン(七七七)がキング・ハリド国

際空港に向かって徐々に高度を下げて行くと、リヤド郊外の光景が視野に入ってきた。慎太郎は、それを感慨深く眺めていた。

とっくに日は落ちていたので、座席脇の小窓からは、煌々(こうこう)とオレンジ色に輝くアーク灯の光に照らし出された道路の上を疾駆する何台かの車、そして遠くにまるで星のようにキラキラと光る無数の街の明かりが見えただけだった。暗闇にうっすらと広がる土漠が懐かしいアラビアの匂いを漂わせていた。

慎太郎の脳裏には昔のことが走馬灯のように駆け巡り始めた。

彼は、外交官だったので、民間の会社に比べれば、若いのに偉い役人と会うことが出来た。

しかし、役所を訪れ、約束の時間を過ぎて待たされることは度々だった。

また、面会を終えて、無事次のアポイントメント(面会の

約束)をとったあと、アラビア語で「インシャラー(神の思し召し)」と言われるのには閉口した。

この言葉には、「今、約束はしたが、その通り会えるかどうかは神の思し召しによる、急に神の思し召しにより会えないこともある」という含意がある。全て神の思し召しによるこの国のことだから、ムスリムには当然の言い回しで、一般的、形式的に使ったまでで特別な意味を込めて使っていたわけではないのだろう。しかし、ムスリムではない慎太郎には取り付けた約束が曖昧(あいまい)なもののように思えて仕方がなかった。

当時のナセル石油相の第一秘書アブダラーもそうだった。彼は、まだ三〇歳と若かったが、いつも約束の時間を過ぎても現れず、三〇分間は待たされた。当初は、無礼な男だと思い癪(しゃく)に障った。しかし、身長が一八〇センチ以上はあると思われるアブダラーがトーブという全身を覆う白一色の民族衣装に身を包み、悪びれもなく、その立派な口髭(くちひげ)、頬髯(ほおひげ)、顎鬚(あごひげ)を生やした、ひ

げだらけの顔に満面の笑みを浮かべて現れると、つい気を許してしまった。また、根が辛抱強い慎太郎はいつも只(ただ)じっと待った。

リヤドの属するナジド地方出身の高級官僚はだいたい肌は白い。アブダラーもそうだった。彼等の眼の色はアジア人らしく茶色だが、西欧人のように目鼻立ちはくっきりとしていて眉は濃く映画の主役にしたいくらいの好男子が多い。そして、皆、背は高く体格も良い。

頭にはシマーグという赤と白の千鳥格子の模様の付いた布をかぶり、イガールという黒い輪でこれを固定している。アブダラーは、サウジ人の典型と言っても良いような姿かたちだった。

アブダラーは米国の大学に留学経験のあるエリートだった。目には金縁の高級な眼鏡をかけ、それらしさを際立たせていた。眼鏡の奥にはキラリと光る大きな二重瞼の目があった。

話す英語は、まるでアメリカ人ではないかと思わせるほど流暢(りゅうちょう)だった。

そのような常に待たされる状況が続いた後の、ある日のことだった。

慎太郎は、いつもの用向きを終え、次のアポイントメントを取って、大使館に帰ろうとした。すると、このアブダラーが、不意に慎太郎の眼をじっと見据えると、

「君は神を信ずるかね？」

と聞いた。

慎太郎は耳を疑った。

「ユア・エクセレンシー(閣下)、今何とおっしゃいました」

と慌てて聞き返した。

「君は神を信ずるかねと聞いたのだよ」

アブダラーは笑みを湛(たた)えた涼しい顔で答えた。

間違いはなかった。石油省での、思いも寄らないアブダラーのこの質問を聞いて、慎太郎は戸惑っていた。最初は、この質問に対し、仏教徒だから神を信ずるわけにはいかないとか、あるいは神道だから神を信じていると応えるのが無難かもしれないと思った。いや、むしろ、そう応えるべきだったの

だろう。
しかし、慎太郎は一息ついてから、思い切って、
「正直に言えば、信じていません」
と応えてしまった。
アブダラーは何か信じるものを持っているという応えを予想していたのだろう。慎太郎の意外な応えに対し、驚きの表情を浮かべた。
モスレムに無宗教あるいは信ずるものがないと応えるのは、一瞬にして人間関係を損なう危険性がある。しかし、根が正直な慎太郎は、それを十分に承知していたが、嘘を付くのが嫌だったし、また、生半可な宗教的知識をもとに敬虔(けいけん)なモスレムと宗教論議をする気も無かった。
アブダラーは、今度は、哀れみの表情を浮かべると、
「それでは、君は、一体、何を信ずるのかね?」
と畳み掛けるように聞いてきた。
この質問で慎太郎はもう一度なんとか取繕う機会を与えられたようなものだったが、敢えて、飽くまで正直に、
「一般的には日本人は無宗教ですから、特定の神様を信じて

いるわけではありません。強いて言えば、日本人は科学を信じているのではないでしょうか」

と応えた。これを聞いたアブダラーは、微笑みながら、

「慎太郎。科学は信ずるものではなく、学ぶものだよ」

と応じた。

慎太郎には、アブダラーの宗教性、聡明さがひしひしと感じられた。また、神を信ずることがモスレムの第一の規範であり、二人が全く異なる次元にいることを痛いほど思い知らされた。そして、アブダラーの哀れみの表情と優しい微笑みが慎太郎の脳裏に深く刻み込まれた。

この時、慎太郎はアブダラーと初めて心が触れ合えたような気がした。正直に答えて良かったと思った。

不思議なことに、これを境にアブダラーの態度は一変した。以降、約束時間の少し前に彼の部屋に入っても、アブダラーは決まってそこにいて笑顔で迎えてくれるようになった。時に、別の用事で石油省を訪れ、たまたま彼の部屋を覗いたりすると、手招きをして部屋の中に呼び入れてくれた。その

歓待振りは、先客がいても、目の前の客をさておき慎太郎と話を始めてしまうほどだった。

慎太郎は考えた。きっと、アブダラーは慎太郎の行動をどこかでじっと見ていて、試してみたいと思うようになったに違いない。そして、応えを聞き判断した。

この問答にサウジ人の用心深い性格と敬虔な信仰心を垣間見た気がした。こうして、慎太郎は、ますますサウジとイスラムに対する関心を深めていったのだった。

彼の居ないうちにサウジは大きく変わっていた。

厳格なイスラムの国であることに変わりはなかったが、以前のような安定性は損なわれていた。特に、二〇〇三年五月にリヤドで自動車によるコンパウンド(高級集合住宅)自爆テロ事件が起きてからは、アルカイダのサウジ支部である“沙漠のサソリ”の攻勢が顕在化して、治安は極端に悪化していた。

主に外国人が居住するコンパウンド三ヵ所で連続的に発

生した、この自爆テロ事件では自爆したテロリスト九人を含め三〇人が死亡、二〇〇人以上が負傷した。米国人は七人も死亡している。沙漠のサソリは、二〇〇三年三月にイラク戦争が勃発(ぼっぱつ)し米英主導の軍隊がバグダッドに侵攻すると、米国に対する怒りを一層露にしていた。外国人が多く居住するコンパウンドはそんな彼等の格好の攻撃対象となった。

また、この事件のあと、リヤド、ジェッダなどサウジの主要都市で治安部隊とテロリストの間の銃撃戦が頻繁に行われるようになり、市民の間に不安が急速に広まっていった。

この事件はオサマ・ビン・ラディンの指示を受けたものだった。オサマは、既に一九九八年二月に“ユダヤ人と十字軍との戦闘のための世界イスラム戦線”を結成して、「全ムスリムは、米国人であれば軍人、民間人を問わず殺害しなければならない」という声明を出し、軍事施設、軍人に限定したテロ攻撃から無差別テロへと路線を転換していた。それ以前、サウジでは、一九九五年に国家警備隊の施設が、一九九六年には米軍関連施設が爆弾テロにあい米国人が死亡していた

ものの、今回のように民間人を対象にしたものはなかった。

二〇〇一年九月一一日の米同時多発テロもこの無差別テロの路線に沿ったものだった。米国がこの同時多発テロを受け、アフガニスタンを空爆して、アルカイダ掃討作戦を実施したことから、アルカイダ側の敵意も一層先鋭化していった。リヤドにおける今回の連続自爆テロは、こう言った流れの中で必然的に発生したものでもあった。また、サウジ政府に対する若者達の不平・不満・怒り、反米感情の爆発と言った側面もあり、サウジ内のテロの根は相当に深い。どこで何が起きてもおかしくはなかった。

しかし、商社マンで世界を股(また)に掛けて飛び回っている慎太郎は、自爆テロ、テロとの対決は何もこの国に限ったことではないし、そもそもサウジは戦時下にあるわけではないと考えていた。ただ、彼には、あれだけ、完璧(かんぺき)な治安体制を誇っていたこの国も変われば変わるものと信じられなかった。

その時、慎太郎は、トリプルセブンが着陸した僅(わず)かな振動で我に帰った。

「皆様、只今当機はリヤド国際空港に着陸致しました。時刻は午後一〇時丁度でございます。安全のためにベルト着用のサインが消えるまでお座りのままお待ち下さい・・・」

トリプルセブンは、高まる慎太郎の期待を乗せて、美しく点々とオレンジ色に光る誘導灯に沿って、静かに滑るように滑走路を走って行った。